

## 新刊紹介

後漢より  
宋齊に至る 譯 經總錄

常盤 大 定著

支那の經錄の研究は、支那佛教研究の土臺石の様なもので、極めて大切なものであるにも拘らず、今までこの方面の研究は餘り進んでゐなかつた様である。これには色々な理由もあるであらうが、第一にはこの經錄といふものが、極めて煩雜な無味乾燥なものであるが爲である。然し、だからと言ふて、この研究を打ち棄て、置くことは絶對に出来ないものである。

それで先づ初に着手せらるべき仕事は、經錄の整理である。あの尨大な錯雜した經錄は、一度どうしても我々が使用するに便利な様に、整理されなくてはならない。その上でないと完全な經錄の研究は出来ないものである。古くは境野博士の「支那佛教史講話」があるが、これは經錄の整理といふよりは、譯經に關する研究であつた。然し當時は、未だ經錄の整理が全くなされてゐなかつたのであるから、實は斯る研究を行ふまでには、未だ時期が到つてゐなかつたのではないかと思ふ。従つて餘りに結論を急ぎ過ぎた様な憾みがないでもない。

新刊紹介

近くは小野博士の「佛書解説大辭典總論」がある。これは正しく經錄の整理であつて、我々が經錄を使用して研究するに當つては、是非とも座右に備へて置くべきものである。然しこれは餘りにも忠實なる經錄の整理に過ぎず、この中から小野博士の抱懷せらるゝ意見を——支那佛教史、特に譯經史上には幾多未解決の儘殘されてゐる問題、或は更に鋭く批判せらるべき問題が山積してゐるが、これ等に對する博士の意見を窺知することは困難である。然しこの事が同時にこの書の長所でもあり得る譯である。

以上の兩書に比較すると、本書の使命の那邊に存するか、略明瞭になると思ふ。本書は謂はゞこの兩書の間を行く様なものである。一方に於て忠實に經錄を整理すると共に、他方に於ては博士自らの意見をも相當に述べて居られる。言ふまでもなく、本書は何處までも「譯經總錄」であるから、經錄の整理といふ事が第一の目的であつて、其の整理の結果を使用しての研究は後日に待つべきではあるが、その整理の結果自然に明にされて來る様な事項、何等の推理も判斷も要せず、整理の結果が其の儘結論である様な事柄に關しては、相當程度まで述べて居られる。一例を舉げるならば、尸陀槃尼の撰した「觀婆沙論」の譯者を、現存のもの、如く僧伽跋澄とせずして、僧伽提婆となすべきであることは、既に本誌（大谷學報第十五卷三號）に於て私が論じて置いた所であるが、今この問題に就いて見ても、博士は私と同じ結論を出して居られる。（八三三頁）——（但し拙稿

は見て居られない様に想はれる。これは僅に一例に過ぎないが、この様な事は全篇を通じて可成りの數に上ることと思ふ。惜むらくは、この様な箇所だけ何とか直ぐ目に付く様に、例へば目次の下に書き入れるとか、特にそれだけの索引を作るとかして置いて欲しかった。さうすれば本書の研究書としての價值も亦數倍する事と思ふ。惟ふに經錄の研究は、斯くの如き容易に到達し得る結論、經錄を比較對照整理整頓することに依つて、其處に、當然達し得る結論を、數多く導き出すといふことが、その主要部分を成すものと思ふ。

次に經錄整理の標準を見るならば、茲にも本書が單に忠實なる經錄の整理たるに止まらないことが首肯出来る。即ち數多き幾多の經錄の中から、博士は先づ「出三藏記集」と「歷代三寶記」と「開元釋經錄」とを撰出して、是等三大錄を中心に整理を進めて居られる。斯る場合、實は何れか特定の經錄を主とし、他を從となすことは、嚴密な意味で言へば事實を事實の儘に傳へることに於て忠實な方法ではない。然し何れの經錄をも同等の價值に於て採用する時は、徒らに混亂を招いて、何等の結論にも到達し得ないのが常である。茲に博士の經錄整理の方針がある。そして何れの經錄を主とし、何れの經錄を從とするか、この場合この方針を價值づける要素となるが、それはその人の日頃の研究の結果に待つべきものである。

四六倍版一千餘頁で、更に四十二頁の索引を附してある。用紙の上質、印刷の鮮明、見るからに氣持のよい豪華版である。

東方文化學院東京研究所發行、定價拾五圓。(舟橋一哉)

# D. T. Suzuki: Zen Buddhism and its Influence on Japanese Culture, Kyoto, 1938.

昭和十一年の夏、英國の倫敦で開かれた「世界宗教大會」に日本代表として姉崎博士と共に出席せられた著者は、大乘佛教の立場から堂々と意見を發表して、時の會長ヤングハツバンドをして「代表中の第一位たり」と評せしめたが、その會議の終了後國際文化振興會の依頼によつて英國及び米國の各種各様な會合の席上、「日本文化」顯揚の爲講演を續けられた。その講演の材料(宗教會議の分は含まず)が本書の約三分の二を占めてゐる。當時の講演の一部は既に英國で、「日本の生活及び思想に於ける佛教」として「アディスト・ロッヂ」より出版せられ「日本の直觀の背後には空間哲學に對して時間哲學を有する」點を指摘してゐることは大いに感興を與へてゐる。残りの三分一は日本在留の外人を對告衆として東京で行はれた講演であり、菊版、二八八頁、挿畫三十八葉、内容は、

前篇、禪とその日本文化に及ぼせる影響、

一、禪の概念 二、日本藝術文化概説 三、禪と武士 四、禪と劍道 五、禪と儒學の研究 六、禪と茶の湯 七、利休

とその他の茶人達 附録、碧巖集の二問答、維摩經の骨子、  
諸曲「山姥」

#### 後篇、禪と日本人の自然愛 四章

本書の特色は社會經濟的發生的な見方よりも、ものゝ存在價值に重點を置いてゐる事で、文化のエスプリと禪の交渉を深層面よりほぐしてかゝる所に獨特の味を持つ。この點では「禪と劍道」「禪と茶の湯」の二章は極めて興味あり、前者の場合には武士氣質の著者が禪によつて鍛へられ華嚴哲學によつて洗はれ近代の學問によつて磨きをかけられた産物を見る事が出来る。その中の一部に劍を説きて、文珠の劍は内向的、不動明王の劍は外向的であるが盧舍那佛は劍を持たぬ、盧舍那佛は劍そのものであり大肯定の實在である。「生死交謝の時いかん?」「双頭斷絶すれば一劍天に倚つて寒し」、此の「一劍」は正しく盧舍那佛であり實在である。楠公は此の一劍を用ひた、と。眞宗教徒の軍人の或る會に「利劍會」と云ふのがあり、利劍即是彌陀名號に由來してゐるのは云ふまでもない、利劍名號即一の所に死を超克して働く軍人の精神が、此の「一劍」の説明で納得せられる。文中、佐賀藩武道の奥義書「葉隠」が巧みに紹介せられ「不動智」や新陰流の極意書等を初め、多くの史實傳話が引用せらるゝ。或る點では著者は一見史眼なきかの如くである、然しこは一種の「誘ひの」隙である。迂濶に批評しやうものなら手痛い挨拶を受くるにきまつてゐる。

後篇は日本人の自然觀を、豊富な材料を縫ひながら極めて綿

密に美しい文脈の粘りを見せながら説けるもの、先月(五・二八)日獨文化研究所に於ける著者の講演「大乘佛教の一樣相と日本人の自然觀」と共に、著者自らが優れた自然神祕家たるの素質ある事を立證してゐる名文、獨逸のスプランガー教授を感動せしめたのも之である。この中で姉崎博士や英國大使館附サンゾム(日本文化史)の著者の禪論を是正してゐるのも注意を惹く。量こそ少なけれ前篇に優るとも劣りはしないであらう。教育審議會を初め各種の機關によつて「日本文化の地位を外國に顯揚せよ」との聲高き折柄此の種の著作を得た事を深く喜びたい。價八圓、大谷大學、「ザ・イースタン・ブディスト・ソサエティ」發行(K)

### J. Maréchal; Études sur la Psychologie des Mystiques, Tome second, 1937.

著者は「イエス會」に屬し、實驗心理學者で又哲學史家で既に「形而上學の出發點」の第一巻を出してゐる。此の方面の研究としては今は佛蘭西は最も盛で倭に十指を屈する程の著名な研究者が居り、記述的精密さと評價の正當なる點はその誇りとする所。著者は神祕主義を以て心理學と形而上學の頂上と認定して第一巻を十八年前に出したが今度はその二巻である。菊版五五六頁、十三章、多方面に互つての論文で量に比して内容はあまり

に簡潔にすぎ力作とは云へない。これは著者の謝る如く病氣の爲に意の如く執筆が出来なかつた爲であらう、一卷の方を可とする。只終りの二篇に於いて本書の價值を認めたい、それは「神祕主義の比較研究」と「同教神祕主義」で、前者に於いて佛教や瑜伽をも論じ佛教涅槃を取扱つた點は興味を惹く、(尙七九頁参照) 材料は主としてブツサン・オルデンベルグ・キース・デビッヅ・オルラマール・フレーザー・ハイラー・マッソン・ウルセル等で、段々西歐の佛教理解の深まりゆく事を知るのは喜ばしい。が未だ禪に就いては發言してゐない、佛文の著作には佛教學と宗教學と問はず禪を扱ふ氣運は未だ來てゐないやうである。(K)

## A. W. Watts: The Spirit of Zen. 1936.

少し古いが外國で出た禪の本としては珍らしいと思ふ。「東方の智慧」叢書中の一篇。鈴木博士の「禪論」によつて非常な興味を持つに到り遂に此の書を出したと云ふ。「一度好奇心が起つてくると容易に抑へ難い」と云ふのは禪は、因襲的な宗教や哲學に疲れたる者には特殊の魅惑を有するから」と。内容は、禪の起原、二、禪の祕義、三、禪の技術、四、禪堂生活、五、禪と極東の文明等、小冊で一三六頁。全體を通じて別に創意を見る事は出来ないが手際よき纏め方を可としたい。支那の或る雜誌に本書が原漢文に着かざる點を難じてゐるが、これは研究書

ではなく禪の普及を圖らんとする趣旨で全く鈴木博士の諸著作に基礎して書かれたもの、その意味でこれは好箇の「大拙禪序説」である。著者は未だ二十三、四歳と聞く、今後の活躍を期待しやう。(K)

## 農村社會學研究

池田 善 長著

最も新しき科學の一として其の學的内容、實質の上から見ても、又單に形式的、外見的にも未だ全く生れ出づる惱みの時代にある農村社會學にとつて本書の如きは黎明の遠からざるを思はしむるに足るものゝ一であらう。

本書を貫く著者の意圖は從つて農村社會學の獨立性の強調であり、換言すれば農村社會學の一科學(社會學にその基礎理論を仰ぐ社會科學の一分枝、二頁)としての成立の根據並にその成立の可能性を論究し、考察せんとするにある。

農村社會學に對するかゝる基礎的にして且つ斬新なる見解はアメリカの所謂新興農村社會學者(P. Sorokin, C. C. Zimmerman, D. Sanderson, etc.)を暫く措き、わづかに我が國に於ける那須皓、渡邊庸一郎兩氏に依る農村社會學序説(春秋社、大思想エンサイクロペヂア、第十四卷、二二三頁—二五六頁)が其の先蹤をなすにとゞまつてゐる。

著者は更にかくの如き觀點より到達したる農村社會學の三の

部門、即ち一、農村社會誌學二、理論農村社會學a、農村社會靜學b、農村社會動學c、農村社會現象學三、應用農村社會學の構想乃至理論を説き、進んで夫々の部門に於ける實證的研究の一、二を論じ、最後に農村社會學關係邦文々献を集録してゐる。

かうした意圖乃至内容を有する本書の叙述の歩みは三篇、八章及び一の附録より成り、次の如くである。

第一篇 農村社會學の構想及び一研究、第一章 農村社會學の概念、第二章 農村社會學に於ける基礎的諸問題、第三章 農村社會學的に觀たる都鄙社會人口の流動關係。第二篇 農村社會政策の指導原理及び其一研究、第一章 農業政策の基調並に農村社會政策との關係、第二章 農村社會政策の根據、第三章 社會政策乃至社會事業を通して觀たる「都市と農村」。第三篇 農村社會學的調査の指針及び其二研究、第一章 農村生活の社會學的調査(第一報第二報)、第二章 農村生活の社會學的調査(第三報)、附録 農村社會學關係邦文々献

かくして第一篇は上述せし三部門の中の理論農村社會學の構想の一端及びその基礎的問題を説き、更にその研究方法の具體的一例として第三章をあげ、第二篇は應用農村社會學の一部門として農村社會政策の理論的根據を検討し、更に第三章に於て其の具體的一研究をなし、第三篇は農村社會誌學としての農村社會學的調査の指針を示して其の具體的ニ研究例を述べてゐる。

以上の諸論に對して特に著者が依つて以て立つ所の社會學の基礎理論及び農村社會學方法論、就中、その對象の限定、更に農村社會學の三部門一般に互り、或は社會學と農村社會學との關係等に就て我々志を同じうする者は多くの賛意を有すると同時に、又少なからぬ批判を持つものであるが今之を措き、只一つ筆者の心に留まるものを述べれば、著者が農村社會學調査の對象となせしものは北海道の農村であり、夫故に比較的新しき植民部落としての農村であり、然も本邦内地と地域的にもやゝその農業形態を異にするものであるといふ點である。

此の點に關して數千年の歴史を有し、且つ極端なる過小經營と水稻農業をその特質とする本邦内地の農村を直接の對象とする我々とは、たとひその調査の觀點乃至立場を全く同一にするとしても、そこに到達し、結論となつて現はれた成果の幾許が異なる所なしとせない。

遮莫、只著者がそれを自覺し、又そのかぎり、於て著者と我等と相互に比較の立場をとりつゝ、歩みをつゞける事がやがて著者と我等との斯學に對する他の一面の義務ともなるであらう。

最後に此の書は自序にもある如く著者が且て

農村研究一ノ一、北海道帝國大學内法經濟論叢第三輯及び第四輯、農業經濟研究 十一ノ四、農村と經濟 三ノ五、社會學徒 九ノ九、年報社會學 第三輯、

等に發表された斯學に關する諸論文の加筆、輯録であり、我々は更に著者の學問的進展を念じつゝ、特にその理論的部門の今

後の發達を望んでやまぬものである。

猶附録としての農村社會學關係邦文文献は精密を極めて斯學研究の伴侶として不可缺のものであり、著者の努力に對して我々の深く感謝する所である。昭和十三年三月二十日 刀江書院 二八〇頁 貳圓貳拾錢 (池田義祐)

## 五人組制度新論

西村 精一 著

五人組制度と云へば一部論者が考へる如く、又一般にも封建時代の制度であり、過去のもの、死せるものとして現代の生活と縁なきものであると常識的に片附けて居る者が少くないのではあるまいか。

かゝる常識的にして且つ無批判的な考へ方に對して著者は五人組の社會團體としての意義を現實の農村生活から再び反省し、豊富なる知識と體驗とに基いて實證的な多くの材料を通して此の特異な團體形式を出来る丈正確に把握せんとしてゐる。

從つて著者の本書に對する抱負乃至使命は序言にも云へる如く單に過去の五人組制度の歴史的研究であると云ふよりはむしろ五人組制度の意義そのものと現代日本農村との本質的連關を闡明し、我國農村問題解決への一の根本的にして且つ重大なる要鍵を見出さんとするに外ならない。即ち

「徳川時代の五人組制度に就ては既に幾多の學者に依つて立

派な研究が成遂げられてゐる。(その代表的なものとしては穂積陳重博士の五人組制度論等がある。——筆者註)

これ故私が本書に於て試みたものは主として今日の五人組制度の研究である。即ち五人組制度が現代の日本農村社會に對して有する意義を究明し、其組織及機能を研究し、更に此制度の實施に關する諸問題に就き檢討を加へんとするのが本書の使命である。(序言五頁)

此の點に五人組制度の新論たる所以が存し、我々は又本書が有する理論的にして然も實際的な貢獻の因由する本源をこゝに見出し得るであらう。

上述の如き著者の見地より出發してゐる本書は八章一附録よりなつて次の如くである。

第一章 農村五人組制度の社會的考察、第二章 五人組制度の歴史、第三章 現代五人組制度の組織、第四章 現代五人組制度の機能、第五章 五人組制度の盛衰を左右する事情、第六章 全國各地の五人組制度の實況、第七章 新五人組制度の着眼點、第八章 新に五人組制度を實施せんとするものへの手引。附録 山本大膳五人組帳

かくの如き内容を有する本書は從つて主として社會學的に又社會政策の上から、特に農村社會學、農村社會政策の上から夫々批判、檢討さるべき幾多の問題を有してゐることば明らかである。

思ふに過去、未來、現在を含む大いなる現在としての現實態

は常に進展し推移してやまぬ。そこに現在のみならず過去が單にすぎ去りしものとしてではなく、生ける過去として刻々に變遷してゆき、畫かれたる未來も又常に現實態に即應しつゝ、その形相と意味とを變轉して行く。過去ののものとしての五人組制度は此の意味に於て又常に新たなる問題を提供し、一方未來の解決にまつ所多き農村問題も又かゝる見地よりして不斷の考察を必要とする。かゝる未來と現在とが落下し合ふ現在に於て現實態の自己窮の尊き姿として、更に又最近京都府が府下農村の二、三をして五人組制度を實施せしめんとしてゐるが如き折柄、我々は本書の出現を心から欣ぶものである。

只我々の注意すべき事はその最初に於て地方民政の根幹として用ひられた徳川時代の五人組制度が後、自然にその法的色彩を脱し、乃至はその上に一の共同社會的(特に地縁的)團體として移行したる所以よりして、又五人組制度の本質が我が國農村の事情に最もよく適應すると云ふ點を以て、更には少數の殘存せる五人組制度の實情より推論して以て對都市、對國家等複雑多岐に互る關係とそれ自體に於ても多くの目的集團とを有する現代日本農村全般に五人組制度の建設がたとひ可能であるにしてもそこに著者が期待するが如き五人組制度の理想的機能が發揮され得るか、否かと云ふ點である。

換言すればかうした乖離的懷疑の生ずる所、そこには共同社會と利益社會との理論上の止揚がたとひ如何に華麗なりとも、事實に於て兩者の相剋が如何に深刻沈痛なるものであるかを我

々は餘りに屢々、又餘りに深く烙識せしめられてゐるからである。

然しながら之或は筆者が科學と哲學とを混同したる謬見に基く所であるかもしれない。昭和十三年三月五日 岩波書店  
壹圓五拾錢 二三七頁 (池田義祐)

## 獨習 西藏文典

寺本 婉雅著

本書は寺本教授の西藏傳譯註佛教研究シリーズの第六輯として刊行されてゐる。西藏文典としては近年、河口慧海、明石惠達兩氏によりてそれ／＼年來の蘊蓄を傾けての著述がある。いづれも依用し得る價值あるものであるが、本書は寺本教授の長年に互る西藏語研究の所産として、又、既往に刊行された同教授の文典の精要として注目すべき出版である。此の種の語學を修學せんとする者にとつて、往々その志望を坐折せしめる因となるものは文典の編輯が簡潔、摘要を得てならぬことで、不必要と思はれるやうな説明が錯綜してゐる爲に、多岐に迷つて遂に難關を突破し得ず抛擲してしまふとはよく聞くことである。これは修學者の根氣の足らぬことにもよるが、一面恰好なる初學者向の文典を提供せぬのがその第一の原因であらう。かうした一般的な缺陷に氣付いて此の文典の著述が成つたものと思はれる。著者の意圖は専ら初學者或は獨學者に容易に習得せ

しめると言ふ點にあることが看取される。發音を假名書にしてゐることもその爲であらう。とに角、西藏語による佛教研究をなさんとする者は一應文典を繙かねばならないが、その入門の書としてここに紹介してゐる文典が最も良きものであり、なければならぬものであると言ふことを明言し得る。著者が三度までも稿を改めて懇切に斯學を修めんとする者の爲に盡瘁せらるゝところは感謝して餘りある。附録として藏文「般若心經」

「轉法輪經」「第六世達賴喇嘛の情歌」を發音、和譯を附して載録してある。たゞ對照してある梵語の考慮を要するものと、誤植が少しく目に付くことである。事情を聞くに、印刷所が不注意にも原稿を紛失するに至つたとの事であるが、このことが少からず此の文典の印刷に關する限りの支障を生じてゐる過半の原因であらう。新に正誤表を印刷して添附される由であるから、毫も著述價值には關係のないことである。尙、これは教授の自費出版であり、百部限定と聞く。敢へて江湖の學徒に薦む。

(一三九頁、昭和十三年五月二十日、默働社發行、非賣品)

(星)

## 研究室彙報

### 眞宗學研究室

#### △眞宗學會

五月十一日 午後三時より第一教室に於て大須賀學長並に新會員歡迎會を開催。席上、學生側より「例會」に對する希望、岸助手より「眞宗論攷」に就ての意見開陳あり、夫々熟慮の上、善處を約して散會。出席者三十名。

五月二十七日 午後三時より第二教室にて例會を開く、講師及び講題左の如し、

僧都禪瑜と其の淨土教思想  
事變と眞宗學

戸松憲千代氏  
安井廣度教授

#### 佛教學研究室

四月十六日午後一時より新京極森永キャンデ・ストアに於て、龍山助教授渡歐歡送會を印度佛教學會・大乘佛教學會合同にて催はす。

#### △印度佛教學會

五月十一日午後三時より第三教室にて例會を開き、山口益教授の「ブーサン教授の想ひ出」と題する講演を聞く  
六月二十三日午後三時より第十一教室に於て例會。講師講題左の如し

四雙八輩に就て

#### △大乘佛教學會

林五邦教授